ドラゴンクエスト　ダイの大冒険～裏の章～

山いもごはん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの時あのキャラは何をしていたのか?をギャグだったりシリアスだったりで描いています。

…だったのですが、だんだんなんでもアリになりつつあります。

ご容赦を。

目次

バルジ島決戦～ヒュンケル&クロコダイン編～ ―――― 1
いざ!!大破邪呪文～アポロ&マリン編～ ―――― 11
ｉｆ～なかよし魔王軍～ ―――― 30
大冒険への旅立ち!!～アバン編～ 43
地上最大の攻防！～バーン&ミストバーン編～ ―――― 49
プロローグ～魔王軍軍団長面接試験～ 58

バルジ島決戦～ヒュンケル&クロコダイン編～

魔王軍不死騎団長『魔剣戦士』ヒュンケルと百獣魔団長『獣王』クロコダインは、ダイ達アバンの使徒に敗北したことで正義の心に光を見出し、共にアバンの使徒の力となることを心に固く誓っていた。

「ヒュンケル……本当に身体は大丈夫なのか？」

「ああ……何度も言うが、オレは罪を贖うため、戦い続けなければならんのだ……」

「ならば行こう。ダイ達のもとへ……」

アバンの使徒一行は現在、氷炎魔団長『氷炎将軍』フレイザード麾下の戦力とバルジ島で交戦していた。

「ヒュンケルよ、ここがバルジ島に最も近い海岸だ。しかし、ことバルジ島の間には『バルジの大渦』と呼ばれる巨大な渦潮が巻いている。ここからはオレのガルーダに掴まって飛んでいこう」

「クロコダインよ……。すまないが空からは一人で行ってくれ。オレは海から行く」

クロコダインはしばしの間訝しんだが、すぐに答えを得たとばかりに言った。

「なるほど……。海と空の二面から攻撃するつもりか」

「いや……そうではない……」
「ではなぜだ……？共に行った方が安全だろう？」
　ヒュンケルは、強い意志を宿した瞳で言った。
「クロコダインよ……。オレが共にガルーダで行った場合、その間オレはどうなる？おそらくおまえに抱きつく格好になるだろう。オレはおまえのピンクのイボ肌など、なんかキモくて触ることもできん。それならばオレは……たとえ大渦があろうとも泳いでもダイ達のもとへ行く！」
　その迫力に、クロコダインが気圧される。
「ムッ……オレよりも遥かに小柄な体躯にも関わらず、凄まじい闘志を秘めている……。これがヒュンケル、これがアバンの使徒か……」
「すまんクロコダイン。助かる」
「なに、気にするな。己の信ずる道を進めと言ったのはオレだからな。ガハハハッ!!」
「ところでヒュンケルよ。どうやって海を渡る気なのだ？」
「無論……こいつを使う」
　ヒュンケルは自らの腰を指差す。
「鎧の魔剣……!!」
『鎧の魔剣』。それは、『魔界の名工』ロン・ベルクが打ったとされる逸品である。普段

は幅広の両手剣のような形状をしているが、鎧化――アムド――の言葉により、一振りの片手剣とあらゆる呪文を弾く全身鎧に変貌する。
「ヒュンケル……まさか……」
「そうだ……この魔剣を、ビート板代わりにする……!」
「バカな……! いかにおまえと言えども、それはさすがに無茶というものよ!」
「無茶かどうか……やってみなければわからん……! この諦めの悪さこそが、アバンの使徒の最大の武器なのだから……!」
クロコダインは、一人涙していた。
「フッ……どうやらオレは、おまえを過小評価していたようだ。ヒュンケル! 一人の武人として、おまえの覚悟、見届けてやる!」
「ありがとうクロコダイン。では行くぞっ……!」
ヒュンケルは鎧の魔剣の先端を前にし、その左右に手をかけ海に向かって走り出した。
ヒュンケルは、何者かの声を聞いていた。
――あなたは力は強いんですが、なにぶんかしこさが低い。それでは真の強敵と出会った時には勝てませんよ。なにせかしこさが低いんですから――
『この声は……アバン……?』

――それに……まだこちらに来てもらっては困りますよ……かしこさが低い弟子の面倒を見るなんて正直ごめんですよ――

「ヒュンケル！」

クロコダインの呼びかけに応じ、ヒュンケルは意識を取り戻した。

「オ……オレは一体……？」

「おまえは溺れたのだ。鎧の魔剣は呪文が効かないとはいえ金属製だ。海に入った途端にドボンと沈んだよ」

『そうか……アバンはそのことを……。』

ヒュンケルは、意識のない中で聞いた師の声を思い出していた。

「しかし、おまえもさすがの武人だ。決して己の得物を離すことなく、共にどこまでも沈んでいったぞ。一人の武人として、敬意すら覚えた」

「クロコダイン……おまえが助けてくれたのか？」

「ウム。真空の斧の力を使い、水の中からおまえを救い出したのだ」

『真空の斧』。それは、魔法の力が込められた斧であり、『つかう』ことによって気流を操り、またかまいたち現象を引き起こすことができるものである。

「ありがとう、クロコダイン」

ヒュンケルは礼を言い、クロコダインの肌から目を逸らした。

二人は、舟、あるいは舟の代わりになるものを探していた。

すると、真新しい舟が見つかった。

「ヒュンケル、この舟などどうだ？爺さんが近海で釣りに使うようなチンケな舟だが、詰めれば人が４人は乗れそうな舟だぞ！しかもまるで以前所有していたものを他人に貸したために仕方なく今作ったかのように新しいものだぞ！」

「そうだな。爺さんが近海で釣りに使うような、だが詰めれば人が４人は乗れそうな舟だな。なにより以前所有していた舟を他人に貸したせいで仕方なく今作ったような真新しさがいい」

「よし、ではこれを使おう。ところでヒュンケル、バルジの大渦を越える方法は考えているのか？」

クロコダインは当然の疑問を口にした。

「それについては抜かりはない。無論……こいつを使う」

ヒュンケルは自らの腰を指差す。

「鎧の魔剣……！」

『鎧の魔剣』。それは、『魔界の名工』ロン・ベルクが打ったとされる逸品である。普段は幅広の両手剣のような形状をしているが、鎧化――アムド――の言葉により、一振りの片手剣とあらゆる呪文を弾く全身鎧に変貌する。

「ヒュンケル……まさか……」
「そうだ……この魔剣を、オール代わりにする……！」
「バカな……！いかにおまえと言えども、それはさすがに無茶というものよ！」
「無茶かどうか……やってみなければわからん……！それにこの諦めの悪さこそが、アバンの使徒の最大の武器なのだから……！」
　クロコダインは、一人涙していた。
「フッ……どうやらオレは、おまえをますます過小評価していたようだ。ヒュンケル！一人の武人として、おまえの覚悟、見届けてやる！」
「ありがとうクロコダイン。では行くぞっ……！」
　ヒュンケルは鎧の魔剣の柄を持ち、舟に乗って漕ぎ始めた。
　ヒュンケルは、何者かの声を聞いていた。
　――あなたは本当にかしこさが低いですね。２０もないんですか？めいれいさせろもさせてくれないんですか――
『この声は……アバン……？』
「ヒュンケル！」
　クロコダインの呼びかけに応じ、ヒュンケルは意識を取り戻した。
「オ……オレは一体……？」

「驚いたぞ。漕ぎ出したと思った瞬間、突然大渦に捕らわれたのだから。もうなんなら漕ぐ前から吸い寄せられていたぐらいだったぞ。ガハハハッ！」
「クロコダイン……おまえが助けてくれたのか？」
「ウム。真空の斧の力と獣王痛恨撃を使い、水の中からおまえを救い出したのだ。新たな必殺技が生まれそうだったぞ！ガハハハッ！」
　獣王痛恨撃。裂帛の気合と共に闘気を片腕に集中し、回転させながら前方に放つ、獣王クロコダインの必殺技だ。
「ありがとう、クロコダイン」
　ヒュンケルは礼を言い、やはりクロコダインの肌から目を逸らした。
「ヒュンケルよ……オレも作戦を思いついたのだが、聞いてくれんか？」
「トカゲ頭にどの程度の策があるのか知らんが……聞こう」
「ウム。先ほどの舟におまえが乗り、オレが獣王痛恨撃で舟を押し出すというものだ。舟は空中を走り、バルジの大渦も越えられるというわけだ。どうだ？」
「なるほど。魔法のように低いところ飛んでいくというわけか。ピンクトカゲにしては悪くない作戦だ。よし、早速試してみよう」
　ヒュンケルは再び舟に乗り、その後ろにクロコダインが立つ。その視線の先にはバルジ島が見える。

「ゆくぞヒュンケル！むううううっ！獣王痛恨撃！」
獣王が、その必殺の奥義を放つ。
果たして舟は、クロコダインの目論見どおり、海の上をバルジ島へ向け進んでいた。
その様子を見届けたクロコダインは、ヒュンケルに背を向け言った。
「戦友よ、しばしの別れだ。次は戦場で会おう。行くぞガルーダ！」
一方ヒュンケルは、舟に乗り高速でバルジ島へ向かっていた。
しかし、ヒュンケルにもクロコダインにも誤算があった。
舟は痛恨撃の闘気の回転に乗り、ヒュンケルともども回転していた。
さながら、ヒュンケルの頭を中心にし、体を針に、舟を針先に見立て超高速回転する時計のようであった。
『くっ……このままでは……。』
今まで経験したことのない回転に、ヒュンケルの三半規管が悲鳴を上げていた。
口から鼻から、あらゆるものが出てしまいそうだった。
『しかし、オレはアバンの使徒の長兄……！オレが闘志を失ってしまっては、ダイ達に、そして師に顔向けができん……っ！』
ヒュンケルは、その凄まじいほどの闘志で、出そうになるものをすべて塞き止めていた。

ヒュンケルは、間もなくバルジ島に到着しようとしていた。
そこでふと気付く。一体どうやって止めるのか。
「クソピンクトカゲが」
ヒュンケルはそうつぶやく。
『せめて、オレが呪文の一つも使えれば何かしら脱出法が見つかるのかも知れないが……。』
と、その時ヒュンケルの耳に何者かの声が聞こえてきた。
――生命ですよ……。すなわち闘気――
『まさか、アバン……!?』
――まだこちらには来ないでくださいね――
まるでアバンが電話を切ったように声が聞こえなくなる。
闘気……そういえば、かつてアバンが見せてくれた、闘気を放出する技……。
そうしている間にもバルジ島の海岸が迫ってくる。
「このまま衝突するよりは、最後まであがいて見せる……っ！」
ヒュンケルは、鎧の魔剣の鍔と柄の交差部分に意識を集中した。
そして……。
それは、奇跡だった。

闘気の放出により、衝撃波がクッションとなり、ヒュンケルは無傷で上陸に成功した。
通常初めて闘気技を使う場合、出力の加減ができず、自らの生命を犠牲にしてしまうこともある。
しかしヒュンケルの場合は、クロコダインへの復讐心を糧に、ただ『生き残る』ことだけが念頭にあったため、偶然闘気の出力が低かったこと。
それでも海岸の岩に闘気が直撃していた場合、海岸の岩は砕け、ヒュンケルも無傷ではいられなかっただろう。
しかし、偶然ヒュンケル自身が回転していたことから、放たれた闘気が集中することなく分散したこと。
これらの偶然が合わさって奇跡となり、ヒュンケルは無傷でバルジ島に上陸したのだ。
言うまでもなく彼もアバンの使徒。諦めない心が奇跡を起こしたのだ。
ヒュンケルは上陸後、すぐに走り出しながら言った。
「待っていろ、ダイ。そしてクロコダイン!!」

いざ!!大破邪呪文～アポロ＆マリン編～

ダイたちアバンの使徒一行は、大魔王バーンに挑み、敗走した。

彼らを救出したのは、魔王軍によって壊滅したはずのカール王国の女王フローラであった。

フローラはかつてのカール王国の地にアジトを構え、打倒大魔王バーンのため密かに準備を進めていた。

アバンをよく知るフローラが、５人目のアバンの使徒として認めた、パプニカの王女レオナ。

大魔王バーンの居城である大魔宮（バーンパレス）は空を自在に飛行でき、また大魔王バーンの魔力による結界があるため瞬間移動呪文（ルーラ）でも突入することはできない。

大魔宮（バーンパレス）へ突入する唯一の方法として、フローラは伝説の破邪呪文、大破邪呪文（ミナカトール）の習得をレオナへ指示する。

仲間たちの助けもあり、見事大破邪呪文（ミナカトール）を習得したレオナ。しかしそんな折、大魔王バーンによって捕らえられたアバンの使徒ヒュンケルと元百獣魔団長クロコダインの処刑が伝えられる。

しかしフローラは、処刑の際に大魔宮（バーンパレス）が処刑場の上空に留まることを見越し、ヒュンケルたちの救出と大破邪呪文（ミナカトール）による大魔宮（バーンパレス）への突入を同時に行うことを計画していた。

～1～

「ねえ、アポロ」
「なんだマリン」
「ヒマなのよ」
「そうか。まあ、わからなくもない」
「そりゃ、姫様には、私たちが不在の間パプニカの安全を確保してー、なんて言われたけどさ」
「魔物たちも最終決戦の気配を感じ取って怯えているのか、大人しいものだしな。国の復興を手伝おうにも、我々はイマイチちからが低いから、力仕事には向いていないしな。そのせいで兵士達にも逆に気を使われる始末だ。まったく、あの時はいたたまれなかった」
「なんだかさ…こういうこと言っていいのかわからないけど…私たちって最近影薄くない？」
「マリン、君もか。私も薄々そうではないかと感じていた」

「カール王国って南東だっけ？となるとあっち…なんかデカい鳥みたいなのいるし」
「あれが恐らく大魔宮（バーンパレス）だろう」
「あんなデカいのがあると距離感狂うわー。カールまで結構距離あるはずなんだけどなー」
「それで、影が薄いという話だが」
「そうそう。賢者といえば職業の花形、パーティーの要よ！一般的な勇者・戦士・僧侶・魔法使いのパーティーが、勇者・戦士・賢者で済むのよ！余った枠にはバダック辺りを放り込んでおけばいいわ。勇・戦・賢・バ、なんて結構な縛りプレイよ」
「ふむ。バダック殿のくだりはともかく、賢者が花形というのは全面的に同意できるところだな」
「でしょ？そんな賢者、ましてやパプニカ三賢者なんて国を代表する賢者であるところの私達がお留守番なんて、人材の無駄遣いじゃない？そもそも、『バ』だって決戦場に行ってるのに…」
「とは言え、姫様のお言葉だ。すべてに優先する」
「その言い方、悪役っぽいわよ」
「私とて冗談も言いたくなる」
「ああ、冗談だったの。あんたマジメだから、冗談と本気の区別がつかないのよね。とも

かく、私たちの目下の目標は、最終決戦が終わるまでに如何にして目立つか。それを考えるのよ。『賢き者』の頭脳をフル稼働して」
「まったく、キミってやつは…」

～2～

「ねえ、アポロ」
「どうしたマリン」
「ヒマなのよ」
「そうか」
「ところで、さっきの影が薄いって話だけど、やっぱり納得いかないのよね」
「というと？」
「私たちパプニカ三賢者って、わりとみんな対等みたいなところあるじゃない？キャラ的に」
「キャラ的に」
「実際、この２５巻『いざ！大破邪呪文（ミナカトール）』の背表紙なんか、三賢者一緒に映ってるのよ。写真撮ったでしょ？」
「２５巻とかはわからないが、写真は、あの時のアレだな」

「なのにさ…。いまやエイミばかりが目立ってさ…。そもそもなんなのよあの子。やっぱりアレ?元敵とのロマンスとか、キャラの差別化にはそういうのが必要なわけ?」
「マリン、少し落ち着け」
「ごめんなさい、ちょっとなんか興奮しちゃって。あの子も昔はね、お姉ちゃんお姉ちゃん、って、私の後ろをついてくるかわいい子だったのよ。あの子が賢者になったのも、お姉ちゃんが賢者になるなら私もなるー、ってほんとになっちゃったぐらいだから」
「それは…ある意味すごいな。センスがあったのか?」
「ううん。むしろ賢者のくせに脳筋。攻撃魔法と剣で戦う方が得意なのよね。回復魔法はもう、からっきしの三級品。前衛でガンガンいっちゃう分にはいいんだろうけどね。あ、なんか地面から光の柱が出てる」
「あれは恐らく姫様の大破邪呪文(ミナカトール)だろう」
「あーあ、消えた。上手くいったってことなのかな?それにしてもエイミよ。私が今、なんて呼ばれてるか知ってる?」
「いや…知らんが…」
「『三賢者のエイミじゃない方』。ひどくない!?メチャメチャひどくない!?」
「それは…さすがにキツいな…」
「今回の決戦だって、しれっと姫様についていってるしさ。下の子ってやっぱりそうい

うところあるのかしらね」
「アレは驚いたな。姫様が当然のようにエイミを連れて行かれたからな」
「アポロや私はさ、産まれたときから賢者になることを宿命づけられてたわけじゃない」
「まあ、私たちの名前もそれを表しているしな」
「そう、太陽の賢者アポロ、海の賢者マリン。アポロの養父も、私の両親も、そう願って名付けたはず。ところがエイミよ。Ａｉｍｉよ。なに？エイミって。もうお父さんたちが、賢者じゃない、普通の女の子として生きてほしいって気持ちが見え見えじゃない。なのに無理して努力して、賢者になって…。バカみたい」
「そうは言っても、可愛くて仕方がないんだろう？」
「そりゃまあ、妹だしね。それも自慢の」
「まったく、キミってやつは…」

～3～

「ねえ、アポロ」
「どうしたマリン」
「ヒマなのよ」
「そうか」

「大魔宮(バーンパレス)の方も動きがないし…ヒマつぶし付き合ってよ」
「かまわんが…何をする？」
「ヒマつぶしの王道と言えばしりとりでしょ」
「なるほど。一理ある」
「で、せっかく私たち賢者なんだから、魔法縛りでいきましょ」
「いいだろう。受けて立とう」
「じゃあ私から。『しりとり』の『り』からね。リレミト」
「トベルーラ」
「ラリホー」
「ホイミ」
「おお、基本ね…。ミナカトール」
「君こそ最新の魔法じゃないか。る…る…ルーラ」
「ラリホーマ」
「『ま』!?『ま』だと!?」
「ほらほら、どうした太陽の賢者？」
「ま…。ま…。見えた！マヒャド！」
「おー、やるわねー」

「何かが降りてきた。天啓かも知れん」
「ドラゴラム」
「『む』!?『む』!?『む』!?む…む…。なあ、キミには慈悲の心というものがないのか？」
「私には慈悲の心というものがないのだー。はい１０…９…８…」
「ちょっ！カウントダウンは卑怯だぞ！む…む…」
「２…１…０！はい、私の勝ちー。敗者には罰ゲームがありまーす」
「くっ…。くそっ…。しかし敗北は敗北。罰ゲームとやら、喜んで受けようじゃないか」
「いち、２４時間耐久トベルーラ。に、薬草早食い大食い選手権（参加者１名）。さん、ベギラマ熱湯風呂」
「どれもこれも結構えげつないな…。その中から私に選べというのか？」
「んー、とも思ったんだけどね。ヒマつぶしに付き合ってもらったわけだし、今回は罰ゲームなしでいいわ。ありがと」
「まったく、キミってヤツは…」

～４～

「ねえ、アポロ」
「どうしたマリン」

「ヒマなのよ」
「そうか」
「なんかモノマネやってよ」
「『老いたりとは言えこのワシはパプニカにこの人ありとうたわれた剛剣の使い手じゃぞうっ！』」
「ブフゥ！クッ…ククククッ…。イーッヒッヒッヒッヒ！」
「マリン、前々から思っていたが、キミは笑い方に品がないな」
「グフッ…！ブクククッ！ウイーッヒヒヒ！」
「マリン…。ちょっと心配になってきたぞ」
「イヒィ、イヒィ、ヒィイイイ…。あー、ヤバい。まさか顔まで寄せてくるなんて…。あなた、かなり光るもの持ってるわね」
「ふむ、私のできる唯一のモノマネだからな。喜んでもらえて光栄だ」
「しかも一瞬のためらいもなく披露するなんて…。大物だわ…。イヒッ…イヒヒヒヒっ…！」
「マリン、大丈夫か？」
「イー、ヒー。大丈夫、ただの思い出し笑いだからブフゥ！」
「マリン…」

「ごめん、もう大丈夫。あー、強烈だったわ。アポロ、他にできるモノマネないの？」
「先ほど言っただろう。唯一のモノマネだと」
「あなた、きっと才能あるわよ。ちょっと他のも練習してみない？」
「まったく、キミってヤツは…」

～5～

「ねえ、アポロ」
「どうしたマリン」
「ヒマなのよ」
「そうか」
「アレやってよ。パプニカ音頭」
「パ～～っプニっカパっプニっカパっプニっカハァ～～ア！」
「ハイ！ハイ！」
「た～～いようっとう～みっとかっぜとっがハァ～～ア！」
「ハイ！ハイ！」
「…」
「どうしたのアポロ？ここからがいいところでしょ？」

「いや…少し王のことを思い出してな…」
「ああ、王様…。王様、パプニカ音頭お好きだったものね…」
「うむ。宴の度に半裸になって踊られて、よくバダック殿に制止されていたものだ…」
「そのせいでパプニカ音頭は半裸で踊るものだって民衆に認知されて、あっという間に廃れていったものね…」
「今となっては姫とバダック殿、我ら三賢者ぐらいしか踊れるものはいないからな…」
「姫様…か。姫様も、いつまでも姫様のままじゃよくないよね。大魔王バーンを倒したら、時期を見て戴冠式を執り行って、女王様になっていただかないとね」
「確かにそうだな…外交的にも王女のままでは格好がつかないからな」
「前にサミットやった時も、ベンガーナのクルテマッカ王がやたらとケチつけてきてたもんね。ベンガーナのクルテマッカ王が。クルテマッカが」
「キミ、『クルテマッカ』って言いたいだけだろう?」
「あ、やっぱりわかる?」
「まったく、キミってヤツは…」

～6～

「ねえ、アポロ」

「どうしたマリン」
「ヒマなのよ」
「キミがそう言うと思ってだな、これを用意した」
「これは…フリップ!?」
「そうだ。回答の時にお手元にある、あのフリップだ」
「本物初めて見た…。アポロ、こんなのどこで手に入れたの!?」
「ちょっとツテがあってな…。それより、このフリップの使い方だ。キミは先ほど、私たちの影が薄いと話していたな?」
「そうだけど…それがどうしたの?」
「そんな影の薄い我々でも、輝いていた瞬間は必ずあるはずだ!それをこのフリップに書いてお互いに発表しようというわけだ!」
「ええ…なんだかそれ、とてもイヤな予感しかしないんだけど…」
「大丈夫だ。自分を信じろ、マリン。とりあえずベスト3を挙げるぞ。では、お手元のフリップにお書きください」
「…」
「…」
「…」

「…」
「…」
「…。さて…私は書けたが…マリン、キミの言葉の意味がわかったよ…」
「でしょ…？やめた方がよかったのよ…」
「しかし、せっかく書いたのだから発表するぞ！セオリーから外れるが1位から発表しよう…。まず第1位！てーれん！フレイザード戦、防御光幕呪文で味方を守る！」
「あー、アレはすごかったわね。さすがは太陽の賢者アポロって感じだったわ」
「ふむ、そうだろうとも」
「ま、その後あっさり魔法で突破されちゃったけどね。防御光幕呪文は魔法には無力だし」
「くっ…！なぜキミは痛いところをついてくるのだ…。キミには慈悲の心というものがないのか？」
「私には慈悲の心というものがないのだー。で、2位は？」
「屈託は残るが…まあいい。では第2位！てーれん！フレイザード戦、『貴様…女の顔になんということを…！』だ！」
「ああ…フレイザードが私の顔を焼いた時に言ってくれたセリフね。でもあなた、そのセリフ持ってくるって私に対して結構エグいことしてると思わない？」

「思わない。私は私の立場を守ることで精一杯だ」
「言うわね太陽の賢者…。まあいいわ。次、３位」
「３位…。３位ね…。よかろう、男アポロ、意地を通して見せるッ！第３位！なし！」
「ん？今、なしって言った？」
「うむ。ないのだ。どう捻っても、ないのだ。先ほどから顔で笑って背中で泣いていた」
「だからやめとこうって…」
「もっと考えてからフリップを持ってくるべきだった…。とは言え私の手番は終わった。今度はキミの番だ」
「さっきあんな惨劇があったのに、ほんとにやらなくちゃダメ…？」
「うむ。いくらキミでもこれは譲れんぞ」
「じゃあ、１位ね。フレイザード戦後、姫様に顔の治療をしていただく。２位、魔法の聖水を取りにきたポップ君にスカートずり下ろされてパンツ丸出しになる。以上」
「以上？３位は？」
「あなたに言われたくないわね」
「そ…そうか…。しかしこう言ってはなんだが、どちらもキミの影が濃くなるエピソードではないな…」
「そうなの…。しかもやっぱり、どっちのエピソードもエイミとごっちゃにされるの…」

「私が浅はかだった…。単に二人とも傷をえぐってしまっただけだな…」
「ま、でも大丈夫！いつか目立てる日が来るはず！前向きに考えましょう？」
「まったく、キミってヤツは…」

〜7〜

「ねえ、アポロ」
「どうしたマリン」
「ヒマなのよ」
「そうか」
「そういえば私の知り合いの魔法使いがね、地底にトンネルを掘ろうとしたの。普通の土と泥と石でできた地面にね。そこを魔法で掘ろうとしたのよ。どうしたと思う？」
「魔法使いの使う魔法を使ってか？皆目見当もつかん」
「それがね、火炎呪文（メラ）で掘ったって言うの」
「…火炎呪文（メラ）で？」
「火炎呪文（メラ）で」
「どうやって？」
「私もそこがわからないの。『火炎呪文（メラ）で掘った』としか言わないの」

「しかし、地底で火炎呪文を使うなど…」
「そう。周りは全部石焼き芋の石みたいになるし、火炎で酸素はなくなるし…。超低濃度の酸素下の超高熱のサウナよ。はっきり言って人が死ねるわ」
「それで、具体的にどのような対策をとったのだ?」
「ただ、火炎呪文で掘った、とだけ」
「火炎呪文で掘った」
「しかもそのトンネル、４人で通ったらしいわ」
「４人で…だと!?どうかしている!」
「でしょ?だから、トンネルのサイズもわからないの。ただ、火炎呪文で掘った、とだけ」
「火炎呪文で掘った」
「まあ、その人って結構ムチャなこと言いながらも実行しちゃう人だから」
「なるほど。かなりの実力者なのだな?」
「あと、工夫が上手いのよね。私たちもパプニカ三賢者だなんて言われてるけど、上には上があるんだから。まだまだ精進しないとね」
「まったく、キミってヤツは…」

～8～

「なあ、マリン」
「どうしたのアポロ？」
「ヒマだな」
「そうね。お、大魔宮（バーンパレス）に雷落ちた。ダイ君の電撃呪文（ライディン）かしら。もう一発。さらに一発。ガンガンいこうぜ。なんかヤケクソになってないかしら」
「ところでマリン」
「なに？」
「やはり我々は、賢者という優位性を生かして行くべきではないかということに気付いたのだ」
「というと？」
「一般的な賢者といえばどんなことをイメージする？」
「やっぱり、攻撃魔法と回復魔法が使えて、後はある程度剣も使える…。ってところかしら」
「そうなのだ。しかし、魔法については僧侶と魔法使いを経験した者であれば両方使える。そして剣は戦士には敵わない」
「確かに言う通りね。あ、雷やんだ。それで？」
「新たな賢者の優位性、それは破邪呪文だ！」

「な…なるほど！破邪呪文は賢者にしか使えない。僧侶＋魔法使いや戦士には逆立ちしたって使えっこない。優位性どころか特異性だわ！」
「姫様が大破邪呪文（ミナカトール）を習得された破邪の洞窟という場所がカールにあるらしい。この戦いが終わったら一緒に修行しに行かないか？」
「ふふ…。いいわね…。あの色ボケの妹とここで完全に差別化を…」
「…」
「…」
「聞こえたか？」
「ええ。ダイ君の声だったわ」
「無差別攻撃…ピラァ・オブ・バーン…黒の核晶（コア）…地上の消滅…氷系呪文（ヒャド）…。時間がない…！」
「それにしても…アレ、『ピラァ・オブ・バーン』って名前だったのね。魔族のセンスってダサい…」
「それどころじゃない！マリン、ベルナの森へは瞬間移動呪文（ルーラ）で行けるか？」
「大丈夫よ！」
「よし、では私はバルジ島へ行こう！ロープは？」
「持ったわ！」

「魔法の聖水は？」
「ありったけ！」
「よし、マリン！」
「なに？」
「今度こそ…目立つぞ！」
「まったく、あなたって人は…。もちろんよ！」
「では行こう！」
「「瞬間移動呪文（ルーラ）！」」

ｉｆ～なかよし魔王軍～

これは、ダイが勇者アバンと出会う、少し前の話…。

「それでは、これより本日の魔王軍定例会議を始める！各軍団長は現在の進攻状況を報告してくれ」
「オレは地底魔城を拠点にパプニカを攻撃している。王は殺害した。陥落するのも時間の問題だろう」
「ワシは現在、超魔生物の研究を行っておる。今の実験が成功すれば、魔王軍の戦力の大幅な増強に繋がるじゃろうて。キィ～ッヒッヒッヒ」
「…」
「ミストバーンは相変わらずダンマリかぁ？オレはオーザムに進攻中だ。脆い兵士ばかりでウォーミングアップにもならねぇ、左半身が寒いったらありゃしねぇ！」
「私はリンガイア攻略に向けて準備をしている。かなりの手練れがいると聞いてはいるが、所詮は人間、準備など必要ないのかも知れんが、念のため…な」
「オレはロモス攻略に向けて魔物を配備している最中だ。近いうちに攻撃を仕掛ける」

「なるほど、諸君らの戦況は了解した。その他、個々人が抱えている問題などがあれば報告せよ」
「ワシは最近腰痛がひどくてのう…。研究ばかりしておるから仕方がないんじゃが、このままでは腰に殺されそうじゃ」
「ジイさんはとっとと隠居して長生きしろってぇんだよ！チッ！なんならオレが直接手を下してやろうかぁ!?オレの温感マッサージは好評だぜ？」
「すまんのう…助かるわい…」
「ン…ンン…」
「ミストバーンどの…。お主まさか…風邪でノドをやられておるのではないか!?しかし声を出せないから咳払いもできない…。そうなのではないか!?」
「…」
　コクコク。
「なんということだ…。地獄のような苦しみではないか…」
「キィ～ッヒッヒッヒ。それならワシがさえずりの蜜から調合したのど飴をやろう。ワシもこの笑い方のせいでノドをやられることが多くてのう。効果はお墨付きじゃぞ？キィ～ッヒッヒッヒ」
「…」

　コクコク。
「感謝などいらぬよ。同じ魔王軍の仲間じゃからな。しかし、強靭なミストバーンどのノドを侵すとは、今年の風邪は性質が悪いのう…」
「よし、各軍団長は風邪予防に留意するよう部下に通達すること！特に手洗いうがいをしっかり行うよう留意させよ！風邪は持ち込ませない、増やさないの精神だ！」
「「「了解！」」」」
「それでは、本日の定例会議は以上でよいか？」
「待てッ!!」
「ど…どうしたのだヒュンケル？」
「バランよ…。お前、オレたちに隠していることはないか？」
「な…何を言っている!?私には隠し事など…」
「竜騎将バランよ…オレはお前の隠し事を無理やり暴くことはしたくない。できれば自らの口で話してほしい」
「ヒュ…ヒュンケル…！」
「…」
「…」
「…」

「…本気、なのだな…。貴様の覚悟、しかと受け止めた！」
「うむ、さすがは竜騎将バランだ」
「ヒュンケル…貴様のおかげで我が心の迷いは晴れた！皆の者聞いてくれ！私は…私は…。私は今日、お誕生日なのだ…っ！」
「おっ…お誕生日だぁ!?バラン貴様、そんな大事なことをオレたちに隠してたって言うのかッ!?」
「貴公、一体どういうつもりで…っ!?」
「フレイザード、クロコダイン、両名一旦落ち着け。他の者も、問い詰めたいことはあろうが、ここは一度オレに預けてくれんか？」
「ハドラーどの…」
「魔軍指令サマがそういうんじゃ、仕方ねェか…」
「皆、感謝する。さて、バランよ。お前が今日お誕生日だというのは紛れもない事実なのだな？」
「その通りだ…。黙っていてすまない」
「なぜ、黙っていた？」
「私の人生は、常に戦いと共にあった。血まみれの道を歩んできた。そんな私がお誕生日を祝ってもらおうなどとは…っ。口が裂けても言えなかったのだ…っ！」

「なるほどな…。事情はおおむね理解した」
「バッカヤロウ！何が血まみれの道だ！仲間に自分のお誕生日を言えねェ、そんなのが仲間だって言えるかよぉ！」
「フレイザード…」
「バランよ、フレイザードの気持ちも理解してやってくれ。ヤツはオレが禁呪法で生み出してから1年足らずでな。自分のお誕生日が待ち遠しくて仕方がないのだ。また、それゆえに他人のお誕生日に対しても敏感で、祝ってやりたいという気持ちが非常に強いのだ」
「そうであったか…。フレイザード」
「なんでぇ？」
「お主の気持ち、非常に嬉しいぞ。ありがとう」
「ケッ…！仲間だからな…。当然だよ…！」
「とはいえハドラーどの、今からではお誕生日ケーキもプレゼントも準備できませんぞ。いかがいたしましょうか!?」
『うぬら、騒がしいぞ。一体何を話している。』
「はっ…これは…大魔王バーン様…。ただいま、定例会議で少々もめておりまして…」
『ハドラーよ。うぬがおりながらこの体たらく…。余が直々に裁定する必要があろう。

全員揃って胃(ストマック)の間まで来るがよい。』
「はっ！承知いたしました！」
「皆の者、すまない。私のせいでバーン様にお叱りを受けることになってしまって…」
「バランよ、今回の失態は管理職であるオレの責任だ。自分を責める必要はない」
「なに、ハドラーどののおっしゃる通り、我ら軍団長は一蓮托生よ」
「気にすんなッってぇの」
「皆…ありがとう…」
「さて、胃(ストマック)の間だ。開けるぞ…」
ガラガラガラ…。
パァン！パァン！
「竜騎将バラン、お誕生日おめでとう！」
パァン！パァン！
「な…なんだこれは…？」
「バランよ…。余がお主のお誕生日を知らぬとでも思うたか？ちょっとしたサプライズよ」
「バーン様…！し…しかし、昨日ここで食事をした時にはこのような飾りつけはなかったはず！」

「余が今日飾りつけたに決まっておろう？折り紙の輪っかや、ティッシュで作ったお花や、『バラン君お誕生日おめでとう！』のパネルなど、すべて余が作って飾りつけたのだ」
「バーン様が…手ずから…!?大変恐縮なことであります！」
「ふふっ…ちなみに竜騎衆の３人も手伝うと言ってくれたのだがな。余の姿が見られてしまうので遠慮してもらった。バランよ、よい部下を持ったな」
「バーン様！」
「ほら、主役がなんという顔をしておる？このタスキをかけよ。そしてケーキの前に行くのだ」
「本日の主役…バーン様…」
「さあ、一番の盛り上がりぞ？」
「「「ハッピバースデートゥーユーハッピバースデートゥーユーハッピバースデーディアバラン～。ハッピバースデートゥーユー」」」
「フゥ～～っ！ありがとう、皆、ありがとう！」
「竜騎将ともあろう者がなにを泣くことがある。さあ、次はプレゼントぞ？」
「まずはオレからだ。お前はいつも顔に飾りをつけていて日焼けがムラになるだろうと思ってな。日焼け止めだ」
「ヒュンケル…気付いていてくれたのか…」

「仲間、だからな…」
「続いてオレだぜェ！オレからは、真空断熱水筒だ！暑いとこでも寒いとこでもオレが持っても中身は適温のままだ！」
「ありがたい…。私達は進攻のため世界中を周るからな。とても助かる」
「へっ。仲間だからな」
「…」
「ミストバーンどの、これは…？おおっ…！まさか、木彫りの1／6竜騎将バランフィギュアだとっ…！なんと素晴らしい出来だ…。真魔剛竜剣まで完全再現とは…。しかもバリ取り、ニス塗りと抜かりがない…っ」
「ンン…。ンッ…」
　コクコク。
「では次はオレだな。オレからは、ちからのたねなどの盛り合わせだ。オレは貧乏性で、こういったものを思い切って使うことができなくてな…。余りもののようで申し訳ないが、是非ともこれを使って武人の極みに達してほしい」
「クロコダイン、本当にいいのか？ちからのたねなどはお主が使った方がよいのではないか？」
「言うなバランよ。オレの気持ち、察してくれ」

「…わかった。ありがとう、獣王よ」
「キィ～ッヒッヒッヒ。ワシからはこれじゃ。夢見の実ＥＸ！寝る前に一粒飲めば、深層心理が最も必要としている夢を見ることができるというものじゃ。夢の力をあなどるなかれ、目覚めればリラックス効果に、頭痛や目の疲れなどがたちまち消えておるというスグレモノじゃ。なぜか腰痛には効かんのじゃがな…」
「ありがとうザボエラよ。確かに私は最近少し疲れ気味なのでな…」
「バランよ、そんなお前にオレからのプレゼントだ。少し休暇を取るがいい」
「なっ…！しかし、私は今リンガイアの攻略準備中で…」
「そんなもの、多少遅れたとて我らの侵略作戦に支障が出るものでもない。それに、どうしても不安なら替わりにザボエラに準備させる」
「そうじゃよ。だからゆっくりと休んだらええ」
「いや、魔軍司令どのとザボエラどののお気遣いに感謝します。この機会にゆっくりと休ませていただきます」
「いまやモンスターの楽園と言われておるデルムリン島あたりにでも行って、羽を伸ばしてくるがいい。あそこはいまだ魔王軍の手が入っていないゆえ、仕事を忘れてのんびりすることもできよう」
「さて、最後は余の番じゃな？」

「まっ…まさかバーン様もプレゼントを…っ!?」
「当然であろう。とは言え、あまり期待されても困るがな…。余のプレゼントは、余の座右の銘を書いた書よ」
「座右の銘…『今のはメラゾーマではない…。』こ…これには一体どういう意味が?」
「それは、お主が余のレベルまで到達したときにわかるであろう。とは言え、余の魔力を込めておるからな。持っておれば攻撃呪文の威力が上がるであろう」
「あっ…ありがとうございます!バーン様のそのお気遣いに感謝いたします!」
「バランよ、お主はマジメよのう…。さらにもう一つ、今日という日の祝いと、我らの絆を確たるものとするため、皆にプレゼントだ。オープンザカーテン!」
「まっ…まさか…っ!」
「バカな…っ!そんなことが…っ!」
「そう…。これが余の姿だ」
「そ…っ!そんなっ!畏れ多いっ!」
「へぇ〜、意外とただのジイさんじゃねぇか」
「ンン!…大魔王様への侮辱は許さん」
「よいよい、ミストバーンよ。本日は無礼講よ。気にするな」
「バ…バーン様…!」

「ちなみにそこにおるミストバーンはな、余の全盛期の肉体を守ってくれておる。今の余とケンカしたら余よりも遥かに強いぞ?」
「それは、バーン様の肉体がお強いのであって、私の力ではありませぬ」
「ふふっ、しかし、それはお主にしかできぬ仕事だぞ?余はお主を信頼しておる。そして、同じくらいにここの皆を信頼しておる。さあ、皆の者!今日は宴じゃ!女に酒に食い物、心ゆくまで楽しむがよいぞ!」
「「「「「「「「オォーーーーッ!」」」」」」」」
「ふふっ、ミストバーンよ」
「はっ」
「余は風通しのよい魔王軍を作りたかった。お互いに切磋琢磨し、助け合い、高め合える仲間たちがおる。そういった組織だ。今日、余が姿を現したのもその一環だ。そして見よ、あの者たちの顔を」
「フレイザード!酒樽を持ってきてくれるのはありがたいが、氷漬けかコゲついているかどちらかしかないのはどうにかならんのか!?」
「うるせぇ!オレだって努力してんだよ!こうやって両手のバランスを維持して…うおっ!酒樽が消えちまった!」
「バランよ～。飲んでおるか?なにせ今日はお主が主役じゃからのぅ～?ム…?お主が

飲んでおるのはオレンジジュースではないか！」
「あ…いや、酒は少々苦手でな…」
「皆の者！竜騎将バランともあろう者が、オレンジジュースを飲んでおるぞ！許されてよいものか！」
「バランよ、魔軍司令としての命令だ。このグラスをぐびぐびっと空けろ！」
「し…しかし…。ほら、ヒュンケルだってコーラではないか！」
「フッ…オレはまだ未成年なのでな。魔王軍に所属してはいるが、魂まで売った覚えはないっ！オレはルールは守る…っ！」
「案ずるなバランよ、後ほど悪酔いに効果のある生薬を調合してやるわい。寝ようが吐こうがとりあえず飲め！」
「こっ…これはアルハラと言うものではないのかっ!?バーン様！バーン様！」
「バランよ、たまには酒に身を委ねてみるのもよいものだぞ？」
「…大魔王様のお言葉は、すべてに優先する…」
「そっ…！そんなっ…！」
「ガハハハハッ！バラン、諦めて飲め！」
「その通りだ！骨は拾ってやるぜ！」
「見よ、ミストバーン。皆、楽しそうにキラキラした笑顔をたたえておる。これが飲みュ

ニケーションだ。これが絆を紡ぐということだ」
「はっ」
「魔王軍は、強くなるぞ。後々まで通用する、最強の軍団になる。もちろん、お主もその一員だ」
「はっ。ありがたき幸せ…」
「ミストバーンどの！お主もこちらへ来い！共に飲もうぞ！」
「…バーン様…！」
「行ってこい。必要なことだ。仕事など忘れて目いっぱい楽しんでこい」
「はっ。仰せのままに」
「ようやくミストバーンさまの登場だぜ！」
「ミストバーン、お主、結構イケるクチではないか！」
「ふふふっ…。魔王軍は、強くなるぞ」

こうして、大魔王バーンと魔軍司令ハドラー、以下六大団長は絆を深め合った。
その後、世界に現れた勇者一行は、魔王軍の絆の力により、絶望的な敗北を喫した。
そして、地上は消滅した。
～Ｈａｐｐｙ　Ｅｎｄ～

大冒険への旅立ち!!～アバン編～

私はあの日、デルムリン島で仇敵であるかつての魔王ハドラーの襲撃を受けました。その激戦の末、私は弟子達を守るため、ハドラーに対し自己犠牲呪文（メガンテ）を使用しました。術者の生命を犠牲として爆発的な破壊力を放つこの術は、神の祝福を受けた者以外が使用すれば命を落とす、諸刃の剣のような術です。私は命を賭ける覚悟でこの術を使いましたが、所持していた身代わりアイテムのおかげで、一命を取り止めていました。

しばらくはデルムリン島の洋上で気絶していたようですが、ヒゲの伸び具合から、1日以上は経過していないことがわかりました。

勇者と呼ばれる私でも、さすがに時が経てばヒゲは伸びるのです。

しかし、ヒゲは伸びなかったものの、私の体はひどく傷つき、一方で髪の毛はサラッサラになっていました。

その時、すぐ近くで人の声やモンスターの声が聞こえてきました。見れば、まさにポップとダイ君が旅立とうとしてるその瞬間でした。

しかしポップよ。その舟はないでしょう。というか、舟ですらない、ボートでしょう。確かに、私たちがデルムリン島へ来たときも同じようなボートでやって来ました。しか

しあの時は、私が針路を指示し、あなたが漕ぐ、という分担だったこそたどり着いたです。あれは、私の魔法力あってこそできる芸当なのです。しかも、そのとって付けたような帆。それはなんですか?あなたはその帆に自分の生命を託すことができるのですか?

デルムリン島から大陸に行くとなれば、まずはロモス王国を目指すことになるでしょう。ロモスまでどれだけかかるか知っていますか?5日間ですよ?舟で5日間かかるのですよ?水は?食料は?針路は?魔物に襲われたら?

もう、完全に海をなめているとしか思えません。それでも彼らは行こうというのです。その時名乗り出て冒険を共にしていく事は簡単でした。しかし、私にはそれができませんでした。

だって、あいつら完全に海ナメてるもん。それにあのボートに3人で5日間とかマジで無理ですもん。

そのため、私たちは彼らの成長を促すため、あえて名乗り出なかったのです。

『家庭教師』を名乗る以上、もっと一般教育にも力を入れておくべきでしたね…。

それはそうと、魔王ハドラー…今は魔軍司令ハドラーと名乗っていましたが、彼は何をしにデルムリン島へやってきたのでしょうか。

直接聞いてはいませんが、なんとなく、『この島か…捜したぞ』とか言っていたような

雰囲気がするので、なにかを捜しにきたのでしょう。

もしも…彼の目的が私だったら、結構…いえ、かなりキモいです。実際、彼は私の破邪呪文（マホカトール）を破った直後に私の元へたどり着いたのです。私が目的だった可能性は充分に高いと言えます。しかし、この広い世界で彼はどうやって私の居場所を把握したのでしょうか。彼にはジニュアールレーダーとかそういうのが積んであるのでしょうか。

そしてその後、彼は演説を始めました。魔王だか魔軍司令だか知りませんが、こういったいわゆる『魔王』的な方々は、皆同じように演説が好きなのでしょうか。それともハドラーがただペラペラと話すのが好きなだけなのでしょうか。こちらが『はい』か『いいえ』しか言えないのをいいことに、彼は本当にペラペラと話すのです。『大魔王バーン』、『かつてとは比較にならないほど強大な魔王軍』。そこまで話して大丈夫なのかと、こちらが心配になるほど情報をペラペラと話すのです。その大魔王バーンとやらも、彼を魔軍司令とやらに指名したことに頭を痛めているのかもしれません。

どういうわけかこの島は、私の破邪呪文（マホカトール）が破られた後も魔物が凶暴化することはないようです。どういう理屈かは私にもわかりませんが、もしかしたらこれこそがデルムリン島が長く平和を保っていた理由なのかもしれません。

このように、私の頭脳はフル回転していますが、肉体には自己犠牲呪文（メガンテ）により深刻なダメージを負ったままです。

となると、体力の回復のためにも、食料の調達は喫緊の課題となってきます。

最初は、ブラス老を脅して、ということも考えたのですが、彼がダイ君と顔を合わせたときに、私が生きていることを万が一にも話してしまうかも知れません。それは、私にとってはあまり望ましいことではありませんし、私もダイ君の育ての親を手にかけることはしたくありません。魔物とはいえ、家族がいる者については、私は斬ることができないのです。

ゆえに、私は、そこら辺をうろついている野良モンスターを食糧とすることにしました。家族がいなければ、まあ所詮魔物は魔物です。いくら殺そうがまた沸いて出てくるのですから。

私は現在武器を持っていません。自己犠牲呪文（メガンテ）の衝撃で、持っていたアイテム類はすべて失われてしまいました。とはいえ、私ぐらいのレベルになれば、素手でもそれなりの攻撃力を発揮できるのです。

島を歩いていると、おおにわとりを発見しました。あれなら殺せば食べられそうです。しばらく観察していましたが、どうやら家族はいないようです。私はそれの背後から近づき、殴り、蹴り殺しました。心ある力というのはいつの世も正義なのです。

私はそのおおにわとりを素手でさばき、焼きました。それは、泥水のようなニオイがし、口に入れるのもはばかられるようなものでした。これは、肉ではありません。モン

スターの死骸です。ジニュアール家が後世に伝えるべきことがまた増えました。
私はかつて、また現在も、勇者と呼ばれています。
実際の能力から考えればいわゆる賢者なのですが、『勇気ある者』が勇者であるのならば、私も、15年前ハドラー相手に共に戦ってくれた私の仲間たちも、皆勇者と讃えられるべき人物なのです。
ただしロカ、お前はダメだ。
お前のせいで4人パーティーが5人パーティーになってしまいました。
しかし、そもそも一般的な宿屋には、扉もなく、ベッドが4つ配置してあるだけです。マトリフはジジイなので早々に寝てしまっていて、私だけがそこで気まずい思いをしながら狸寝入りを決め込んでいました。
あの宿屋の状態でことに及んだと考えれば、ある意味であなたが一番の大勇者なのかも知れません。
私は『ゆうべはおたのしみでしたね』と言ってあげるべきだったのでしょう。
数日経ち、肉体がある程度回復したところで、私はデルムリン島に来た本来の目的を達成するために調査を開始しました。
それは、ジニュアール家に代々伝わる古文書と、世界情勢から導き出した、私の知識と勘によるものです。

すなわち、あるかも知れないし、ないかも知れない。
しかし、調査を進めるにつれ、島の至るところに魔法力の『痕跡』とも呼べるものが発見されました。
私の目的は、それが悪の手に渡ることを防ぎ、いつの日か必要となる日まで守っておくことでした。
そして、その痕跡は海岸から海へ向かっていることがわかりました。
ポップとダイ君がいれば、まず間違いなくあれを守ってくれることでしょう。
私はひとまず安心し、故郷であるカール王国へ向けて帰るのでした。

地上最大の攻防！～バーン＆ミストバーン編～

「ミストバーンよ」
「はっ」
「余は、お主になんという役職を与えた？」
「はっ。魔影参謀にございます」
「そう。魔影参謀よの」
「はっ」
「そしてハドラーには、地上の元魔王ということで魔軍司令の座を与えた」
「はっ」
「実際にハドラーは司令官として、各軍団長に対し指示や命令を出しておる。もっとも、いささか人望に欠けるきらいがあるようだがな」
「はっ」
「ところでミストバーンよ。お主は参謀として一体何をしておるのだ？」
「と、おっしゃいますと…」
「余の命を狙う死神（キルバーン）と仲良しこよしでキャッキャウフフしておるばかりで、なにもして

おらんではないか」
「面目次第もございません」
「なんでも、お互いにあだ名で呼び合っておるとか」
「はっ。おっしゃるとおりにございます」
「とは言え、余もお主に対し、絶対沈黙を命じておるわけだからな。魔王軍の中で動きにくいのもわかる。しかし、彼奴の主は余の好敵手たる冥竜王。余は、死神を飼い慣らすことは一興だとは思うが、探られるとなると興が削がれる」
「はっ」
「しかも」
「はっ」
「ミスト、キル、と呼び合っておるそうだな」
「左様にございます」
「ふふっ…。あだ名のために、主である余の名を省略するとは…。ミストバーンよ、お主は余を軽んじておるのか?」
「とんでもないことです。申し訳ございません」
「もっとも、余は寛大な男だ。その程度のことは赦してやる」
「はっ。恐悦至極に存じます」

「それはそれとして」
「はっ」
「お主らは一体なにをキャッキャウフフしておるのだ。その姿がまったく想像がつかぬ」
「畏れながら言わせていただければ」
「うむ」
「我々は、性格こそ対極であれ、自然と気が合ったのです」
「ふむ、それで」
「それで…とおっしゃいますと」
「普段は2人でなにをしておるのかと聞いているのだ。まさか2人でモノポリーでもあるまい」
「はっ。主に人生ゲームなどに興じております」
「人生ゲームとな…。それは、2人で遊んで楽しいものなのか?」
「はっ。就職や転職、結婚など」
「そういうことを聞いておるのではない。余とて人生ゲームくらい知っておる。魔界の人生ゲームは長すぎて、後半ダラダラになることも知っておる。そうではなく、人生ゲームとは複数人で遊んで初めて楽しいものではないのか、と問うておるのだ」

「はっ。おっしゃるとおり、複数人で遊ぶと非常に楽しいものでございます」
「…ミストバーンよ」
「はっ」
「もう一度、先ほどの言葉を申してみよ」
「畏れながら。人生ゲームは、複数人で遊ぶと非常に楽しいものでございます」
「ふむ、確かにそのように申したのう。ミストバーンよ、余の解釈が正しければ…」
「はっ」
「まさかお主、今まで1人で遊んでおったのか?」
「左様にございます」
「人生ゲームを?」
「人生ゲームを」
「1人でルーレットを回し、1人で車を進め、1人で銀行の管理もしておったのか?」
「はっ。なにぶん1人でしたもので」
「ふむ…。天地魔界に恐るる物なしと自負してきた余だが、さすがに涙が浮かんできたぞ。仕方あるまい。キャッキャウフフについても免じてやろう」
「ありがたき幸せと存じます」
「ところで」

「はっ」
「お主らは如何なる会話を行っておるのだ」
「と、おっしゃいますと」
「ただ人生ゲームをしておるわけではなかろう。その間、如何なる会話を行っておるのだ。やはり、死神が話し続け、お主がそれを聞き続けておるのか」
「いえ。キルはああ見えて、他人と一対一となると極度に緊張し、会話ができなくなるのです。一方で私は、何年もバーン様に1人でお仕えしてきたことなどもございまして、むしろ一対一の会話の方が得意なのでございます」
「ということは、お主ら2人は、人生ゲームを楽しみながら、お主が話し、死神が話を聞いておるということなのだな」
「まさしく、その通りでございます。さらに申しますと、2人とも気が合うということが他にもございまして」
「うむ。言ってみよ」
「2人とも酒がまったく飲めないのです。そのため、人生ゲームのお供は、いつもコーラとポテトチップスでございます」
「高校生の誕生日パーティーだな」
「はっ。その点についても、気が合うよねー、とお互いに申しております」

「お主、まさかとは思うが、余の情報を漏らしたりはしておらぬよな?」
「はっ。おっしゃる通りにございます。おしゃべりも、ミストの声でおしゃべりしておりますゆえ」
「ふむ…。それならばよしとしてやろう」
「恐悦至極に存じます。そういえば、先日キルが話していたことなのですが」
「うむ。申してみよ」
「はっ。畏れながら。なんでも、冥竜王の心臓は封印されている本体とは別のところにあって、それを破壊せぬ限りは幾度も蘇るとのことです」
「…その話、真であろうな」
「恐らくは真にございますかと。『キミ(ミスト)だけには話しちゃうけどさ』と申しておりましたので」
「それは、文字通り致命的な話ではないか」
「はっ。私も最初は、『魔界大冒険』でも見たのかな、と思った次第でございますが、どうやら真のようでございます」
「なるほど。余も、冥竜王に対してすぐに行動を起こそうとは思っておらぬが、知っておいて損のない、どころか有益な情報である。誉めてつかわす」
「はっ。ありがたき幸せに存じます」

「先ほども確認したが、お主は余の情報は流しておらんのだな？」
「おっしゃる通りにございます」
「ふむ…。人生ゲームのくだりを除き、結果だけ見れば、お主は魔影参謀の職務を果たしていると言える。その点は誉めて遣わす」
「はっ。恐悦至極に存じます。『キミ、たまに声変わるよね』と言われることはございますが、バーン様の情報は一切漏らしておりませぬ」
「ミストバーンよ」
「はっ」
「それは、時折、余の肉体を使って話してしまうということか？」
「はっ。おっしゃる通りにございます。人生ゲームが盛り上がって参りますと、『あれ？どっちが自分の声だっけ？』となることがございますゆえ」
「ミストバーンよ」
「はっ」
「お主には余の肉体の管理を任せておるはず。そしてそれだけがお主の存在理由のはず。それを、余の許可なく使用するなど、ましてや人生ゲームなどにおいて使用するなど、お主は余を軽んじておるのか？」
「滅相もないことです。キルが『バーン様、一気にずいぶん老けこんじゃったよね。あれ

なら封印されたままの冥竜王様でも楽勝かもね。』と申しておりましたので、私はカチンときて、闇の衣を取りバーン様の全盛期の筋肉(マッスル)を見せ付けてやった次第にございます。キルの奴め、それはそれは驚いておりました。ざまあみろでございます」
「ミストバーンよ!・貴様、自分が一体何をしたのかわかっておるのか!」
「はっ!キルにバーン様の全盛期の筋肉(マッスル)を見せつけてやりました!・しかし、驚いた後に『そういえば前に冥竜王様がおっしゃってたよ。彼奴はもっと肉体派だった。』と。私はもう悔しくて悔しくて!・人生ゲームをひっくり返してやりましたとも!・キルが勝っていた人生ゲームを!・ざまあみろでございます!」
「ミストバーンよ、わかったから少し落ち着け。お主のしたことは決して赦されることではない。本来であれば処刑も辞さないところよ」
「はっ。心得ております」
「しかし、お主は冥竜王の弱点を聞き出した。これに免じて今回は赦してやろう」
「はっ。寛大なお心遣いに感謝します」
「うむ。よい。」
「時にバーン様。畏れながら私からもお伺いしたいことがあるのですがよろしいでしょうか」
「申してみよ」

「はっ。バーン様のカイザーフェニックスでございますが」
「うむ」
「太古よりカイザーフェニックスと呼ばれていらっしゃったとか」
「うむ」
「バーン様は、ご自身が息災でいらっしゃった時代のことも太古と表現されるのですか」
「ミストバーンよ」
「はっ」
「あれは言葉の綾だ。深く切り込むでない」
「はっ。申し訳ございません。時に、バーン様」
「なんだ？」
「キルからＬＩＮＥが参りました。曰く、『今から遊ぼーよ』とのことです。お許しがいただけるのであれば」
「うむ。行くがよい」
「なお、本日はインディアンポーカーを行うようです」
「その情報は不要だ」
「失礼いたしました。それでは、再び戦場へ…」

プロローグ～魔王軍軍団長面接試験～

勇者アバンによって倒されたかに思われた魔王ハドラーは、大魔王バーンによって命を救われていた。

そして今、ハドラーはバーンにより、新生魔王軍の魔軍司令の座を与えられていた。

新生魔王軍は6軍団からなり、各軍団長がそれぞれの軍団を統括する。

これは、そんな軍団長選抜のために行われた面接試験の記録である。

「それでは皆様、こちらでお待ちください。後ほどそれぞれお名前をお呼びいたしますので、そうしましたら面接室の中へお入りください。なお、本面接の順序と、先の記述試験の成績との関係はございませんので、ご理解ください」

案内役を務めるシャドーが一通りの説明を終える。

面接の待合室には、3人の人物がいた。小柄な者から大柄な者まで、まさに多種多様といった様相だ。

「いや、どうにもこういう場は緊張しますな」

最も大柄な魔物の男が、沈黙に耐えかねた様子で、誰ともなく声をかけた。

そしてもちろん、その声に答える者はいなかった。

「では、バラン様、面接室へお入りください」
「はい！」
最初に呼ばれたのは、中肉中背の人間と思われる男だった。齢は３０前後だと思われる。
彼は、面接室のドアを３回ノックした。
「どうぞー」
その声を合図に、彼は面接室のドアを開けた。
「失礼します！」
そこには、３人の人物がいた。
１人は、ローブを頭から足の先まですっぽりと着ており、顔すら見えない者。１人は、顔に笑顔が貼りついたような仮面をかぶった者。１人は、いかにも魔王、といった貫禄を持った魔族だ。
「バランと申します！よろしくお願いします！」
「それでは、そこに腰掛けてください」
「はい！失礼します！」
魔族の面接官に促され、バランがパイプ椅子に腰掛けた。一呼吸おいて魔族から質問があった。

「それではまず、当社を志望された動機をお聞かせください」
「はっ。私は、これまで、人間を護るという立場での職務を数多くこなして参りました。ところが彼らは、自身が脅威から護られているときは、私に対して感謝する一方で、私が脅威を排除すると、今度は私を脅威としてみなすようになるということが数多く見受けられました。私はそのような人間の愚かしさ、そして傲慢さに嫌気がさしたのでございます。ゆえに私は、人間を地上から一掃するという御社の社風に惹かれ、この度志望させていただいた次第でございます」
「あなたを雇用することで魔王軍にどのようなメリットがあるのかを教えてください」
「はっ！私は、剣と魔法の両方を比較的得意としておりまして、実績といたしましては、神々と連携し、魔界に君臨する冥竜王ヴェルザーを封印したことがございます！」
　その瞬間、仮面の発する雰囲気が少し変わった。しかし、仮面の下にある表情までは読み取れない。
「なるほど、戦力としては申し分ないということですな」
「いや、お恥ずかしい限りで」
「ボクからもちょっといいかな？」
　仮面が尋ねてくる。
「はっ。なんなりと」

「キミ、志望動機はきっと人間の手のひら返しだけじゃないよね。キミの瞳には、もっと鋭い、人間への憎悪…いや、復讐心と言ってもいいかも知れない。そんなものが見えるんだよね。もちろん、プライバシーに関わることだから、答えなくてもいいけど」
「申し訳ありません。隠すつもりはなかったのですが、あまりにもプライベートなことでしたので…。私は、妻を失っているのです。それも、人間の、彼女自身の父親によって。そのため、私は、人間に対して復讐…ニン間…ニンゲン…人ゲン…人間…ニンゲン…殺ス…滅ぼス…コロスホロボスコロスホロボスコロスホロボス！キヤァァァァー！」
「混乱か！誰か！天使のすずを持っている者はおらぬか！仕方がない…バラン殿、一撃食らわせるぞ！」
　混乱には物理攻撃を一撃。常識中の常識である。
「はっ…。私はなにを…」
「どうやら、一時的に混乱状態に陥っていたようだ。すまぬが、回復のため、一撃入れさせてもらいました」
「はっ。お恥ずかしいところをお見せいたしまして…。お手数をおかけいたしました！」
「しかし、あなたの人間に対する憎悪はかなりのものですな。面接の参考にさせていた

だきます」
「はっ。ありがとうございます」
「それでは、バラン殿から質問などはありますか？」
「いえ！ございません！」
「わかりました。それでは、あちらのドアからお帰りください。本日はお疲れ様でした」
「はっ。ありがとうございました！失礼いたします！」
　ドアを開けながらバランは、今日の面接も失敗だろうな、と考えていた。
「焦った…。面接にはあんなのも来るのだな…」
「んー、ボクは好きだけどね。ああいう、狂気にも似た憎悪ってヤツ。まあ、彼にはちょっと思うところはあるけど」
「ところで、ミストバーンはなぜこの場におるのだ？話もしないし、ただ座っておるだけではないか」
「ミストに面接なんて酷だよね。まあ、２人よりも３人の方が箔がつくしね」
「そもそも死神よ、お前もだ。なぜ魔王軍の面接にお前がいる？お前は魔王軍所属ではないはずではないか？」
「それこそバーン様のご意思ってやつだよ。ここも人手不足みたいでさ。ある程度実力のあるヤツを選んでいったらボクに白羽の矢が立ったってワケだよ」

「むう…。バーン様のご意思ならば仕方がない。先ほどの質問も、結果はああなってしまったが、的を射ていたと思うしな。よろしく頼む」
「ウッフッフ。了解」
「よし、それでは次の者を入室させてくれ」
「クロコダインと申します！よろしくお願いいたします！」
　一分の隙もない完璧な礼をしながら現れたのは、二足歩行のピンクのワニ、という表現が似合う魔物だった。その身長は優に２５０ｃｍはあるかと思われ、皺のないリクルートスーツを綺麗に着こなしている。間違いなくオーダーメイドの品だろう。ネクタイもセンスのよい物を選んでおり、第一印象は良好だった。
「それでは、まず弊社を志望された動機をお聞かせください」
「はい！オレ…私は、地元では力自慢で通っております！実際、戦って私に傷をつけることのできる者は１人もおりませんでした！故に、私は地元では王だの主だのと祭り上げられておるのですが、私自身としては、そのような立場にあることは非常に遺憾なのであります！私は、この力を、我が主と認められる方のために使いたいと考えておる所存でございます！」
「なるほど、自身のためではなく、主のため、というわけですね」
「はい！左様です！」

「ちなみにその力ですが、どれほどの鍛錬で身につけられるものですか？」
「はい！１日に腕立て伏せ３０回、腹筋２０回、スクワット２０回であります！」
「えー、もう一度よろしいですか？」
「１日に腕立て伏せ３０回、腹筋２０回、スクワット２０回であります！」
「中学生の部活でも、もう少しハードな気がしますが…」
「はい！私もそう思いますが、これだけのトレーニングでなぜかこの筋肉を維持できてしまうのです！ひとえに言って才能かと存じます！」
　確かに、それだけの負荷であの筋肉がつくというのは、才能かも知れない。ハドラーはそう考えていた。
「ボクからも少しいいかな？」
「はい！なんでございましょう！」
「キミのパワーがすごいのは理解できる。確かに、一撃はとても重そうだ。ただ、小さな素早い敵に出会ったとき、キミはどう対処する？あるいは、どう対処してきたのかな？」
「はい！私には、怪力の他に、焼けつく息という相手を麻痺させる技と、闘気流を渦状にして相手にぶつける技を持っております。前者は、相手は予想外の攻撃を食らうということから、非常に命中率が高く、また相手を麻痺させることにより、一時的に移動すらできなくさせることができます。後者に至っては、闘気流自体が直撃せずとも、小兵な

らば木っ端のごとく蹴散らすことができます！」
「フーン、なるほど。力一辺倒じゃないってワケだね」
「はい！そのように自負しております！」
「なるほど…。それでは、クロコダイン殿の方から聞きたいことはありますか？」
「いえ、ございません！主となる方のため、精一杯力を振るう所存でございます！」
「わかりました。本日はお疲れ様でした。それでは、あちらのドアからお帰りください」
　クロコダインは、彼の体に比して小さなパイプ椅子から立ち上がり、一礼して部屋から出て行った。
「さて、死神よ。どう思う？」
「うーん、彼の忠誠心は立派なモノだと思うよ。実際にバーン様のお声を聞けば、さらに磨きがかかって、意外と化けるんじゃないかな」
「そうだな。なにより、見た目の割には礼儀正しかったしな」
「体育系なんてあんなモノだよ」
「さて、次で最後だ。入室させてくれ」
「かしこまりました」
　案内役のシャドーが言う。
「イィ～ッヒッヒッヒ。失礼いたしますぞ。ワシは、ザボエラと申します」

「ザボエラ殿ですな。それでは、そちらの席におかけください」
「それでは失礼して…。この年になりますと、やはり腰にきますゆえ」
ハドラーは面食らっていた。
なんだこのジイさん…。就職面接の場なのに、変な笑い声とともに登場し、いきなり自分の腰の話を始めおった…！ここはイニシアティブを取らねば、延々と話を聞かされてしまう！
「では、面接を開始させていただきます」
「イィ～ッヒッヒッヒ。よろしくお願いしますぞ」
「まず、弊社を志望された動機を教えてください」
「ワシは、魔法や呪法、人体の改造などの研究を行っております。先日も、息子を実験体にしたのですが、これがもう怒って怒って。『父さんひどいや！』なんて言うもんですから、こちらも売り言葉に買い言葉で、『お前のような者はクズじゃゴミじゃ』と罵ってしまいましてな。やはり母親がおらず男手一つで育ててしまうとこのようになってしまうんですかのぉ…」
ハドラーの驚愕はさらに強くなっていく。
ヤバい、ジイさんしゃべりすぎる。しかし内容はかなり興味深い…。だけど肝心の志望動機は話していない…。どの程度まで聞いてみるものか…。

そして、ハドラーがくだした結論は…。
「先ほど、息子さんを実験体にされたということですが、具体的にはどういった研究なのですか?」
「ええ。これが、あらゆる魔物のいいとこ取りをして息子に全部ブッこむというものでしてな。頑強さとしなやかさなどが共存した、最強の魔物を誕生させるというものですな」
「ほう…。それは、魔王軍としてはかなりの戦力増強となりそうですな」
「ありがとうございます。ただ、現在の問題として、強化対象がその強化に耐えられる肉体を持つ魔族にしか使えないことと、強化後は呪文が使えなくなる、というものがございます」
「それは、研究が進めばどうにかできるものですかな?」
「1年や2年といったスパンでは無理でしょうが、必ず解消できる問題かと存じております」
ハドラーは、面接の流れに安堵していた。
ジイさん、ちょっと大人しくなってきたな。オレの聞き方がよかったのか。
「ウッフッフ。ボクからもいいかな?」
「イィ～ッヒッヒッヒ。なんなりと」

こいつらウゼぇ！なぜいちいち言葉を挟まないと話せないのだ!?
変な口癖２人の会話を聞きながら、ハドラーはうんざりしてきた。
「呪法についても研究してるってことだけど、具体的にはどういうことかな？」
「はい。まだ完成はしておらんのですが、最新の研究となりますと、呪法による罠にあらかじめわずかな魔法力を残しておき、なんらかの対象が通ることで自動的に罠が発動する、といったものですな」
「ウッフッフ。いいじゃない」
「イィ～ッヒッヒッヒ。ありがとうございます。あとは、罠が発動する対象を選べれば完璧なのですが」
「ウッフッフ。そこまでやっちゃうと、後世の魔族が研究しちゃう部分がなくなっちゃうからさ。伸びしろは残しておいてあげようよ」
「イィ～ッヒッヒッヒ」
「ウッフッフ」
「えー、他にザボエラ殿からご質問などはございますか？」
「ワシは、研究ができる環境と、それを実践できる戦場があれば、他にはなにもいりませぬ」
「わかりました。本日はお疲れ様でした。それでは、あちらのドアからお帰りください」

ザボエラは、ハドラー達を振り返ることなく、腰をさすりながら真っ直ぐにドアから出て行った。
「ハドラー君！彼はいいよ！是非採用しようよ！」
「しかし、人格面に問題が…」
「魔族なんてどこかしら狂ってて当然なんだからさ！それより彼の技術はすごいよ！魔王軍の魔術担当にすれば魔法技術が一気に跳ね上がるよ！」
こんなに興奮する死神を見るのは初めてだ。逸材なのかも知れない。
自分には理解しきれない分野の内容を理解できる者が隣に座っているということは、ハドラーにとっては思った以上に安心できた。
「さて、面接も終了したことだ。バーン様に報告に参る」
「ハドラー君、ボクも行くよ。あと、ミストもね」
ハドラーの脳裏を稲妻が走る。
ミストバーン…すっかり忘れていた…。隣に座っていたというのに、なんたる不覚…。これはフォローしなければ。
「ミストバーンも当然行くよねー？一緒に面接したもんねー？」
ミストバーンはコクリとうなずく。
こうして、ハドラー、ミストバーン、キルバーンはバーンのもとへ報告に行くのであっ

た。
「うむ、全員合格とせよ」
「は？」
　バーンのもとへ到着するなり言われた言葉に、ハドラーは一瞬困惑する。
「聞こえなかったのか？全員合格とせよ。それとも…理由が必要か？ハドラー」
「い…いえ、バーン様のおっしゃるとおりに」
「まず、余も面接の様子は見ておった。どいつもこいつもクセがあってよいではないか」
　結局、理由をおっしゃるのか…。ハドラーの当惑は無理もない。
「続いて２つ目。これが最も大きな理由であるが…応募者が少ないのだ」
「は？」
「世間は好景気のようでな。うちのようなブラックな会社に応募してくる者は少ないのだ。そもそも、今回も５人募集したにも関わらず、３人しか集まらないというこの体たらく。やはりハローワークでの求人が甘かったのか…」
「左様でございますか…」
　魔軍司令でありながら、そんなことまで気が回らなかったことに、ハドラーは反省していた。
「おそらく、もう一度募集をかけても応募は少なかろう。よって、方針を変える」

「と、おっしゃいますと？」
「まずミストバーンよ。お主はその辺の子どもを見繕って誘拐し、人間を憎むよう洗脳して暗黒闘気の使い方を叩き込め」
　ミストバーンはコクリとうなずく。
「そしてハドラーよ。お前は禁呪法を用いて、強力な魔物を一体生み出せ。魔物の種類などはお前に任せる。必要ならばミストバーンのサポートも認める」
「はっ。かしこまりました」
「それでは、新生魔王軍誕生への第一歩に向けて、一本締めで締めようぞ。よーお！」
　ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱん！
「いよっ！」
　ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱん！
「いよっ！」
　ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱぱぱん、ぱん！
「いよーーっ！」
　ぱちぱちぱちぱち。
　こうして、波乱含みの新生魔王軍が誕生したのだった。